
とある少年の右手の力

キムタケ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある少年の右手の力

【Nコード】

N3937K

【作者名】

キムタケ

【あらすじ】

厳しかった寒さも和らぎ、そろそろ新学期を迎えようとしていた。今年度から、中学三年生になる上条当麻は進学のお祝いとばかりに不幸に遭遇する。それが、どんな結末を迎えるのかを知らずに。これは、まだ上条当麻が自分の右手の力について何も知らないころのお話。

(この作品は「とある魔術の禁書目録」の二次創作作品です。しかし、本編での伏線を、作者の妄想によって勝手に回収してしまうか

もしれません。ので、そういったものを嫌悪する方は、ご遠慮ください)

序章 不幸からの始まり 1 | year | ago (前書き)

はじめまして。

小説を読んでいたら、たいして文章能力も無いのに、

小説を書くこととしているバカです。

なるべく、原作と違いが無いようにしていこうと思っておりますが、もし、間違っていたら指摘してくださいとありがたいです。

序章 不幸からの始まり 1 | year | ago

今日も超絶不幸少年上条当麻は、路地裏を走っていた。

理由は簡単、追われているからだ。

それも、一人二人ではなく、十数人単位。

勝てるのは一対一、一体二なら危うくて、一体三以上なら迷わず逃げるといふ、

普通の少年で、普通に暮らしていれば、手に入れることなどないはずの

彼の喧嘩の経験から、一体十数など戦地に飛び込むことと同じであり、よって逃げるしかないのだ。

あたりまえだが、後ろのほうからは

「おら、いい加減止まれや、チキン野郎！」

とか

「止まらんと、ぶっ殺すぞ！」

などの静止を促す罵声が飛び交っているが、

止まったらそこで、生命の危機に瀕することは火を見るよりも明らかなので、

そんなことで止まる馬鹿がいるか、と心の中だけで思いつつ

上条当麻は、学園都市の迷路のような路地裏を縦横無尽に駆け巡っていた。

そう、ここは学園都市。

総人口は二三〇万人弱。そのうち八割が学生という、文字通り学生

の街だ。

東京西部に位置する円形の都市ではあるが、どちらかという巨大大隔離空間に近いかもしれない。

都市の周囲は厚い壁で覆われ、その中で学生たちは「記憶術」などという名目で、

日夜「脳の開発」に励んでいる。

しかし、超能力は全員に発現するが、その強度には個人差がある。

学園都市の中でも七人しかいないと言われ、たったひとりでも軍隊に匹敵する能力を持つ「超能力者^{レベル5}」と呼ばれる者もいれば、

上条や、いま上条を追いかけているような「無能力者^{レベル0}」と呼ばれる者がでてくる。

もちろん、そんなことは無能力者から見たらおもしろくないことであり、

しかも、そんな無能力者が学生の内の六割である。

大半はそんな能力の差による劣等感に苛まれながらも、真面目に努力しようという者で占められているが、努力することを諦め、「不良」になる連中も出てくるわけである。

上条はというと、そろそろ「日常」と化してしまった「不幸」を嘆きつつ、

「だああー！ああもう！不幸だー！」

と（彼にとっては）いつもの台詞^{セリフ}を叫び、階段を脱兎のごとく走り抜け、

大体の路地のゴミ箱を蹴飛ばしながら駆けていく。

そろそろ体力も切れかけてきたというところで、目的の、自分の寮が見えてきたことに安堵する。

ここまでではいつも通りの上条当麻だが、いつもと違うことが三つある。

一つは、インデックス禁書目録がいないこと。

二つ目は、記憶喪失になっていないこと。

そして、三つ目は・・・、

まだ、自分の右手の力について何も知らないことだ。

序章 不幸からの始まり 1 | year | ago (後書き)

とても短いですが、まあそこは序章だということ勘弁してください。

完結まで、お付き合いしてくださいませとお願いです。

第一章 上条当麻の日常 Boy meets Girl (前書き)

やっと第二話が完成しました。

これからも、これぐらいのペース(3〜5日ぐらい)で書いていこうと思います。

上条って、体が先に動くタイプでしたっけ

第一章 上条当麻の日常 Boy meets girl

1

上条当麻。

これは、学園都市に住んでいるとある少年の名前だ。

外見だけから判断するのなら、どこにでもいるという言葉がぴったりなくらい、普通の学生といえるだろう。ただしそれは、外見からだけなら、だつたらの話だ。

上条当麻は普通から少し外れた人間だ。

理由は、二つ。

不幸を超越する不幸体質と、超が何個つくかわからないくらいのフラグ体質があるからだ。

上条の不幸体質は「並」ではない、というより「超」すらも超える。何かに躓いてこける、必要としているものを踏む、机の角に足をぶつける、などというものは日常茶飯事。

不良たちにはぼ八つ当たりぎみにかまれることもあれば、スーパールの特売で買ったものをその帰り道に落とす、

風呂では滑ってこけ、拳銃の果てには宿題をやっていないことを就寝直前に思い出し、

やりきったと思ったら、次の日忘れるという不幸のオンパレードという日もある。

そのうちには、学園都市超能力者^{レベル5}、「超電磁砲^{レベルガン}」の異名を持つ少女に追っかけられたりするのだが、これは余談。

フラグ体質の方も、「超」を超えているかもしれない。

とにかくたてまくる。先の不幸体質もあって、少女が不良に絡まれているという

普通は、テレビドラマの中でしかありえないような、シチュエーションもざらにある。

そのうちには、フラグが一万を超えるのだが、これも余談。

さて、なぜ今上条は追われているのかというと、その普通はほぼないはずのシチュエーションにたまたま遭遇してしまったからである。

このときから、さかのぼること二十分。

上条は病院に行っていた。

理由は、発熱、吐き気、頭痛、その他いろいろな症状が出ていたから。

上条は、クラクラする頭をフル稼働し、なぜこうなったのかを考えていた。

（おかしい。別に布団をかぶらず寝てたわけじゃねーのに、なんで風邪なんか……。）

とかなんとか、いろいろ考えていたわけだがフラフラの頭でまともに考えることなどできるわけがなく、

そんなことを考えているうちに、病院に着いていた。

「軽度の食中毒ですね」

これは病院で検査を受けたあとの、先生からの一言。

「しよ、食中毒？」

まったく予想外の診断に呆ける上条。

「はい、そうです。ブドウ球菌による食中毒ですね。まあ、症状は軽いのでこのままでも治るでしょうが、一応薬を出しておきますね。」

「はあ。」

これは、ため息ではなく、ただ単に原因を考えていたため、あまり話を聞いてなくて、
適当にしてしまった所謂空返事だ。

「まったく、気を付けてくださいよ。昨日は、異常気象が、とくに蒸し暑い日だったんですから、
春だからといって油断しないでくださいよ。」

「…はい。」

「（…でも、ツリーダイアグラム樹形図の設計者が天気を外すことなんていままで一度もなかったのに…）」

「えっ、なんかいいましたか？」

「いや、なにも。では、お大事に。」

上条は先生の咳きが気になったが、特に重要でもないだろうし、そもそも

よりもよって食中毒でフラフラなのに、そんなこと気にしていられるわけがない。

病院を出た後も、上条は食中毒の原因について考えていた。

（おかしいな。スーパーの特売で買ったものも、ちゃんと賞味期限は確認していたし、特に変なものを食った……、）

と、ここで上条は昨日のことをもう一度よく思い出して確認し、

（ま、まさか、昨日の夜、やけに冷蔵庫を開けるとき扉が軽かったな、と思ったけどまさか……。）

そのまさかであった。

原因はわからないが、昨日の昼から夜まで上条宅の冷蔵庫はほんの少しあいていた。

それを、昨日の異常な暑さが直撃。冷蔵庫に入れるものを30度を超える日に外に出しているのと同じ状態にしては、もつ食品のほつが少くない。

上条は、春休みだというのに補習で、帰ってすぐ必要最低限のことだけをすまして寝たので、

気づくことすらできなかった。

さらに、冷蔵庫は通常の温度にしようとしたと孤軍奮闘していた。

それはつまり電気代が余計に増しているということだ。

食中毒と電気代の増大の二重苦。

不幸だー！！ と上条はいつも通り心の中で叫ぶ。
いまから絶叫マシンに乗って、「不幸だー！！」とだけ絶叫して
こよつかな、
と暑さと食中毒と不幸によるショックで考えが変な方向に傾いてき
た上条。

まあ、不幸だといえは不幸だが、今回は自業自得ともいえるだろう。
頭痛と熱で誰が見てもわかるくらい、フラフラしていた上条は
さすがに春の日光といえども病人にはこたえるので、
なるだけ路地裏など日陰の多い道を選びながら、寮に帰ろうとして
いた。

こんなときに限って、上条の能力が発動するわけで……、
上条は、数人の男に囲まれている 誰がどう見ても不良に絡まれ
ているとしか見えない 少女を見つけてしまう。

「ああー、もう。なんでこんな時に限って……、」

(何があった?)

「食中毒でフラフラしてなかったらなあ、」

(まさか、絡まれてるとか、)

「まあ、あの有名な長点上機学園の生徒っばいしな、大丈夫だろ。」

(じゃあ、なんであんな状態になってる?)

上条の中で表と裏が言い争っていた。

「ああ、なんだよもう、今日は不幸のバーゲンセールか？食品の特
売なら大歓迎だが、こっちは願い下げだつての。」

そのため息交じりに呟きながらも、上条の体は動いていた。

(どこに行っても、不良つてのは絶えないのかしら。)

わたぬきかきみ綿貫風味は、呆れたように心の中で呟く。

彼女もまた病院からの帰りだった。

その道中で絡まれたのである。

「なあ、姉ちゃん。俺らと今日いつしよに遊ばない？」

「楽しいことたくさんあるぜー。まあ、俺らにとっては、だがな。」

「あはははは！」

文字通り下品な声がいくつも通りに響き渡る。

綿貫はそんな声を無視しつつ、まるで言い聞かせるように思う。

(別に、彼らが薄情ってわけじゃない。見ず知らずの他人を助ける義務なんてないし、)

通りを歩いている人たちは、綿貫を囲んでいる不良たちを気づかないふりをしながら歩いていった。

当然と言えば当然である。

自分から面倒事に首を突っ込む人などはそうそういない。

もちろん「彼ら」というのは、通りを歩いている人たちのことだ。

(誰だつて、自分がかわいい。そんなことはわかってる。どうせ、

「私はあの有名な

長点上機学園の生徒だから、助ける必要はない。」とかなんとか思
つて自分を言い聞かせている

奴らばかり。こんなところに入ってくるのは、よほど正義感の強い
高位能力者が、

それともヒーロー気取りの奴ぐらい、いずれにしてもよほどのバカ
ぐらいだ。)

そこへ、そのバカが^{上条}ー不良たちのだ真ん中へーまるで遠慮というものを知らない人のようにズカズカと踏み込んできた。

最初は綿貫も、ここまでのバカは初めて見たと感心していたが、

「おっ、いたいた。いやあ、連れがお世話になりました。」

(……。)

「悪いな、遅れちまって。じゃあ、どもすいませんでした。あっはっはっは」

(……………)

なんだか方法は悪くないのに、一瞬でも心を動かされた自分がバカだったと思った。

しかし、とりあえず(どんな方法だとしても)この場から脱出できればいいのだが、

「おい、ちょっと待てや」

そうは問屋がおろさなかった。

「お前、好きだな、そういう助け方。」

前にもこんな方法で助けてたんかい！ とツッコミたくなる綿貫だったが、

さすがにそこまで空気を読めないわけではないので、我慢する。

「あれー、えつと…、どつか出会いましたっけ？」

「前にも同じ方法で同じ奴に、捕まえてた女を逃がされたんだけどなー。」

あときは世話になったな。今回は、わかってるよな？」

どうやら顔見知りのようだった。

第一章 上条当麻の日常 Boy meets girl (後書き)

まず、言い訳します。

途中の絡まれている部分が、アニメの超電磁砲と大体同じになってしまいました。というより、参考にしちゃいました。

だって、オリキャラの性格が同じこと考え……、すみません。錯乱しました。

こんな作者ですが、どうか暖かい目で見ていただけるとありがたいです。

P.S.

なんだか、切る部分が不自然な気がするのは僕だけでしょうか？

第一章 上条当麻の日常 Boy meets girl 2 (前書き)

すみません。

本当にすみません。

もうどれだけ謝っても済まないことですよね。

これからは、もっと間を短くできるように頑張りますので、最後までお付き合いのほうよろしくお願いします。

あとアドバイスとか「ここが悪い」などの批判でも結構ですので、いろいろ感想をお願いします。

3

(不幸だ……)

上条は、今日何回目かすらもわからないため息を心の中で呟く。

熱や頭痛で頭はクラクラするし、顔見知りだった(上条は覚えていないが)から作戦は失敗するし、

これを不幸と言わないのなら、なんと言うのだろう。

まあ、こんなものはほぼ日常化しているから驚かないと言えば驚かないのだが、上条はいい加減こんな仕打ちをしてくれる神とやらを拝んでみたくなった。

そんな現実逃避の中でも、周りの時は止まらないわけで、

「今回はわかってるよな？」

不良が上条を標的として認めた。

前回のこともあるだろう、今回は捕まったら絶対に生きて帰れない、上条は直感的に察する。

不良たちは、いつでもケン力できるよう臨戦態勢に入っている。

元からこのような輩は、最初から話し合いなど通用しない。

しかし、まだ可能性は少なくとも説得を試みてみようと思わなくもない。

ただし、こんな状況になってしまうと、もう駄目だ。

言葉での説得など受け入れるはずがないことがわかってしまう。

となると選択肢は戦うか、逃げるかしかないのだが……、

(逃げるか……)

上条は、自分の力のなさを嘲笑う。

先ほどにも述べたとおり、上条には たとえ右手の力を勘定に入れたとしても

一対多数で戦えるRPGの主人公ヒーローのような力はない。あるのは、不良の中にも突っ込んで行くことのできるぐらいの度胸と、そんな不良との戦い(?)で手に入れた無駄にある体力だけ。

(毎度毎度、生き残れるのが自分でも不思議になってきた……)

いつもの不幸もこういう時は無えな…、と思いかけてよく考えたら、今この状況にあることが既に不幸だということに今更ながら気づく。

しよーがない、と上条は決意すると不良たちを前に、

「お前ら、本当に懲りないのな。いい加減自覚しろよ、自分のしていることぐらいさ。そんなことだからいつまでたつても無能力者レベルから抜け出せないんじゃないのか？」

一度、たった一度だけ高い壁にぶつかっただけ、それだけなのに諦めてしまった不良たちに憤りを感じる。

まあ、無能力者以下の俺がいつものもなんだが、 と上条は自分で思つて鬱になる。

上条の右手の力、「幻想殺し」イマジンプレイカーは学校で行われる身体検査システムスキャンでは反応しない。幻想殺しはただ異能の力を打ち消すことができる力、しかしそれは裏を返せば打ち消すことしかできない、異能の力を吸収して自分の物にするわけではない ようは、ある事柄にたいし

て起こる反応のようなものだから、測定できないのだ。だから、上条はスプーン曲げすらできない（無能力者でも脳の血管がブチ切れくらい、集中すればスプーン曲げくらいならできる）無能力者だと思っ……ている。

流石にどんなに賢い、聡明な人でも、ここまで言われて黙っている人はいないだろう。上條もそう思っていた。

だからこそ、

（これならだれも怪我せずに……）

と確信していたのである。

いつもなら、普通にしているも向かってくるが、今回は女の子から注意を逸らさなければならなかった。

誰もが怪我をせずに終わらせるには、不良達全員が上条について来てもらう必要がある。そこでもし、役割を分担されたら意味がないので彼等を怒らせることにしたのだが、

「それだけ言うってことは、覚悟はできてんだろっな？」

上条の目の前にいるリーダーだろうが、そんな風に見える風貌の不良が齒軋りの音を振りまきながら、ゆっくり、しかし着々と迫ってくる。

平常心を保とうとしているのだろうが、言葉を発している声は普通でも、表情が普通では無かった。

ちょうど、獅子舞と似ている感じた。

その後ろではよくテレビの中の不良たちがやっている、今から本気で力を出す合図のように指の関節をパキパキ鳴らしている不良や、

身体が前傾姿勢になっている不良たちがいた。それは自分が久しぶりに獲物を見つけた狼の縄張りに踏み込んでしまった子羊のような存在、いかに上条自分が矮小だということを実感させようとしているようだった。

(す、少し、火がつきすぎだと、思うんだけど、……)

火に油を注ぐという表現すらも足りないだろうと思えるほど、不良達は怒り狂っていた。

第一章 上条当麻の日常 Boy meets girl 2 (後書き)

短いすよね。

自分で書いていたときは、もうちょっと長くかけたかなと思ったんですけど、

2000字もいってないって……。

こんなんでも、最後まで絶対には絶対に完結させますので。

言い訳ではないですけど最後に、

高校生って忙しいですね……。

立派な言い訳ですね、すみませんでした。

第一章 上条当麻の日常 Boy meets girl 3 (前書き)

お久しぶりです。キムタケです。

もう何も言っても言い訳なんで、これからの投稿速度を上げていく
ことで謝罪の代わりにしようと思います。

数瞬前に自分から言っておきながら、上条はさっきの自分を恨んだ。

確かに少し言い過ぎた感はある気がしないわけでもない。こんなこと言われたら自分も腹をたてるだろう。だからこそ、こいつらをここから引き離すには最適だと思ったのだが、さすがにこれほどまで怒るとは思わなかったのだ。

そんな思いにふけている間にも 考え込む上条を観念したと思っただろう 不良たちは、じりじりと靴を鳴らしながら近づいてくる。

(なんとかこの子からは引き離さない)

不良たちの迫力に押されていた体に言い聞かせると、頭を切り替えてどうやってここから逃げるか、考える。今回の といつてもいつもでもあるが 目的はあくまで「人助け」、不良から少女を引き離せば「勝ち」。少女のすぐ後ろは壁だし、目の前には五、六人の不良の輪、とすると一番引き離す確率が高いのは……、とここまで考えて上条は顔を顰める。

(でも、ここまで来て失敗したら後味が悪いし、そもそも何しに来たのかわからなくなる。ならある程度のリスクは……)

見ると、もうすでに不良たちとの距離があと四歩ぐらいにまで肉迫していた。

もう悩んでいる時間など無い。

一瞬自分が不良たちに捕まりボコボコにされるシーンが目に見え、すぐに頭から降り払う。

上条は意を決すると走り出した。

綿貫の反対側　不良たちの輪のど真ん中へ。

上条が考えた策は、強硬突破だった。

無謀に思えたが、不良たちが近づいてきてくれたおかげで、反応される前に輪を突破できるだろう。また、不良たちが上条のやや後ろから、ようは確実に捕まえるために回り込むように上条を囲ったのが功を奏した。その代わりに不良と不良の間隔は広くなり、そこから抜け出せそうになっていたのだ。

それでも、輪の間隔は狭かったが、体を横にすれば、十分なくらいだ。ぶつかることなくすり抜ける。

近づいてきてくれたおかげで、輪を抜けるのに二秒とかからなかった。

不意を突かれた不良たちは戸惑うが、

「てめえら、なにボケーっとしてやがる！　早く追いかけてやがれ！」

というリーダー格の言葉に背中を押されるように、上条の後を追いかけて始めた。

無駄にでかい声の指示に後ろを振り向くと、やっとというか、ついにというか上条を追いかけたところだった。捕まったら一巻の終わりなので、走ることに集中しようと思いを向く。

流れる視界の中でさっきの少女が呆気にとられたような表情をし

て固まっているように見えた気がした。

リーダーが指示を発声している時間、それを聞いて不良たちが行動に出るまでの時間、そのたった一、二秒のやり取りの間にも、上条はふらつく足に鞭を打ち、赤に彩られた道を駆ける。

上条のいつも通りの日常が幕を開ける。

4

周囲が夕刻の色彩を帯び始めた頃、目的地の自分の寮が近づいてくる。十五分ほど走っただろうか、少し遠回りしたので余分に時間がかかってしまった。

後ろからはもう何も聞こえてこないが、万が一のことを考え、上条は走る速度を上げる。

どれだけ振り切ったとしても、そのことに安堵して自分の寮に入っていく場面を誰かに見られたら、目も当てられない。最後の最後まで、周りに気を配ってないといけないのだ。そうしなければ、仮に自分の部屋に入る場面まで見られなかったとしても、奴らは人数の多さを利用してしらみつぶしに一部屋一部屋探すかもしれない

そこまで執念深いとはいくらなんでも思わないが、あの様子を見ると無いとは言えないので困る。そんなことされたら、いつかは見つかってしまう。

いくら科学の研究が二、三十年ほど進んでいる学園都市といえど

も、寮はオートロックでは無い。外と同じような、簡素な鍵式の扉だ。力技で破ることなど造作もないだろう。押し入れられ、狭い部屋で猫に追い詰められた鼠のような状態になってしまふ。「窮鼠猫を噛む」なんてことわざもあるが、あの人数ではどうしようもない。ベランダから逃げようにも、上条の部屋は七階。真正面には別の寮があるが、そこに飛び移る度胸など無いし、仮に飛び移れたとしても、「不法侵入者」といううれしくないレッテルが貼られてしまふ。もちろん、飛び降りるなど論外だ。

寮まであと一〇〇メートルを切り、最後の十字路を左へ曲がる。急に視界が開けた。

いい加減、体力も気力も底を尽きかけていたが、そんなことには気にも留めず、血の色に染まる通りを疾駆する。

朝方なら車の往来も多少はあるのだが、この時間帯ともなるとほとんど無いに等しい。それ以前に学生の都市であるが故に、車自体の絶対数が少ないのだ。だっ広い道路に自分の足音だけが響く。ふと前を見ると、墨汁をたらしたような影が三つ。上条からはちようど逆光になっていてどんな人物かは判断できない。

なにか話合いでもしているのだろうか？

身振り手振りで何か話しているようだが、この距離からではまだよく聞こえない。

しかし、次の言葉だけは、やけに鮮明に鼓膜を震わした。

「見つけたぞ！」

疲れの影響か、煙草の影響か、少ししゃがんでいる声を閑散とした寮周辺に響かせる。すると他の二人とともに走り出した。

こちらへ向かって。

その行動が意味することを即座に理解すると、身を翻し、いま辿ってきた道は無我夢中で戻る。さつき曲がった十字路を通り過ぎ、その一本奥の道を左へと曲がる。

体が常態よりも激しく酸素を求めているが、気にせず足を動かす続ける。

しかしまさか、回り込んでくるとは思わなかった。

こういう不良は大概煙草を吸っていて、体力はそんなに持たないと見当をつけていた。だからこそ、少し遠回りして寮に向かっていたのだが、ここまで動けるとは予想外だ。

速度を緩めずに後ろを振り向く。

見覚えのある顔だった。趣味の悪い髑髏に似た模様のシャツに、恐怖心を煽るためなのか耳にはピアスが付けられている。確かりーダー格の男だったはずだ。

「……こつちも体力尽きかけてんだから、はやく諦めやがれよ、くそ」

小さく悪態をつきつつも、こんどこそ煙に巻こうと路地裏を探して走る。

またもや、路地裏を巡り巡って五分。もう意識が飛ぶんじやないか、という思考にとらわれつつ、上条はT字状になった路地を右に曲がる。雀の涙程度の体力を振り絞っているのだが、確実にさつきよりも遅い。その証拠に後ろからの罵声がよく聞こえる。

次の十字路をまっすぐ突っ切ろうと思った矢先に、その方向から不良達が走ってくるのが見えた。

携帯で位置情報を交換していたのだ。今のご時世、GPSがついた携帯なんてザラにある。だれか一人が標的かみじょうを見つけ、それを見失わなければ、簡単に包囲できる。

すばやく後ろからきている不良との距離を確認すると、左右どちらに逃げるか考えるが……、またそこへ不良の集団が走りこんできた。左右どちらにも三、四人はいる。しかし、

(数が合わない……?)

最初あの女の子に絡んでいたのは、確か六、七人だったはずだ。追いかけていたときにもそれは確認した。それが、明らかに増えている。

仲間を呼ばれたのだ。そう気付くのに時間はかからなかった。

いち早く自分の身の安全を早く確保しようと結構なハイペースで逃げていたのが仇となった。このままでは逃げられる、と思った不良たちは携帯で呼んだのだろう。

前後左右を人の壁に封鎖され、上条はうろたえる。

(くそっ……)

今度は絶対に逃さないためか、不良たちは不意に走るのをやめると、ジリジリと迫ってくる。

足音が静まり返った路地に染みわたる。

規則正しい一歩一歩が、まるで自分の命のカウントダウンのように思えた。

なすすべもなかった。文字通り絶体絶命だ。

(くそっ、俺にも超能力ちからがあれば……、)

上条は、自分の力を知らない。知っていたとしても、この状況を打破できるような能力ではないが。この都市では、強い超能力ちからというのは一種のステータスである。一般に超能力といえ、誰

もが夢見るであろうものだ。しかし、それが常識であるここでは、このステータスが表すのは、自分の能力の強度、名門校に入学できる可能性、そして、自分の才能の程度。

最初は、自分の能力にただ期待する。自分は特別だと思う、思いたくなる。しかし、その内で特別なのはほんの一握りの選ばれた人間だけ。他の大体の人間は、まざまざと自分の才能を、わざわざ数値化されて見せつけられる。

『無能力＝才能なし』
センスゼロ

この等式がなりたつことは、夢を見られる幻想郷ではなく、縮小された格差社会といえる。自身も無能力者である上条は、不良たちの気持ちも理解できたし、諦めてしまったことにも痛いほど納得できた。

そして、超能力ちからが欲しいという感情にも。

毎回人助けをするたびに感じる、逃げることしかできない自分の無力さ。それが、上条の欲望をより一層掻き立てていた。だが、現実はその簡単に願いをかなえてはくれない。そうでなければ、無能力者が全体の六割を占めるなどありえないからだ。

才能という壁。

言葉にするのは容易いが、実際には重くのしかかってくるもの。

上条は顔を下に向けると、目を閉じた。

それは、諦めたようだった。

不良からの逃亡も、残酷な現実リアルからも。

上条との距離も、もう三歩となかった。

「手こずらせやがって。だが、鬼ごっこもこれで終わりだ」

上条は反応しない。あれだけ抵抗しておきながら、最後はあっさり諦めたことを訝しみ、殴りかける瞬間になって反抗してくるかとも思ったが、そんな気配は無い。

周囲の仲間に視線を送ると、反対にこちらはいまにも暴走してとびかかりそうな気配を醸し出している。

この絶対的有利な状況に緊張を解き、かかれ！ と言おうとしたときだった。

一陣の風が自分と上条を分かつようにして吹き込んできた。すると、その風があたかも合図だったかのようになり、風による轟音が静寂を吹き飛ばした。腕を顔の前に持ってこなければ、目も開けられないほどの強風。地面の砂が巻き上げられ、全身に次々と津波のように襲いかかる。

しかし、風向きがおかしい。

風による圧迫感はどう考えても上からきていた。自然の風ではこんな現象は起こらない。仮に、自然現象だとしても、この都市の気象予報衛星 確実に当てるので、気象預言と言ったほうがいいのかもしれないが ツリーダイアグラム 樹形図の設計者はこれほどまでの強風なら、発生時間、強さ、方向などは、予測し、発表する。しかし、今はそんな予報など無い。

ならば、これは能力者、エアロシューター 風力使いによる風になるのだが、これほどまでの強風ともなると、異能力、強能力程度では不可能だ。つまり、

すくなくとも、大能力者以上であるということ。

戦慄という言葉がこれほどまで似合う状況はもうないだろうと思
った。

自分たちが狩る側から狩られる側に変わっていくのを本能が感じ
取る。

途端にこの強風は、巨大な威圧感が風となって襲ってきているか
のように感じた。視界が歪む。自分が立っているのが、本当にコン
クリートの地面なのかも定かではなくなっていく。気がつくとも膝を
ついていて。まるで自分が崇めている存在が、たったいま降臨しよ
うとしている様を茫然と眺めている宗教信者のようだった。

ふと目の前を見ると、いつの間にか顔をあげ、上を見上げている
上条は驚愕の色に染まっていた。恐る恐る上を見ると、不良は上条
の表情を理解する。

能力で体を浮かし、ゆつくりと不良と上条のちょうど中間地点に
着地したのは、

さっき、不良に絡まれていた女の子

綿貫風味だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3937k/>

とある少年の右手の力

2011年5月14日04時40分発行